米欧回覧

第２７号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

四月例会から・・・
今後の展開について語り合う
―設立七年目を迎えて

熱を帯びる全体討議

七年目にはいった最初の例会は、四月十三日（土）午後から国際文化会館で行われ、年間の事業報告、会計報告、会務報告に続き「今後の会の活動について」ブンブンミーティング（自由討議）が行われた。本会に期待する建設的ないろいろの意見が出された。（詳細は三ページに。）

例会の全体討議（４月13日・国際文化会館）

感銘深かった 斉藤純生氏の講演

続いて斎藤純生氏（日本文献出版社社長）より、『実記』の英文版出版に関する講演があった。日本人でさえ読むのに苦労する漢文調の原文を逐一英訳することは「ほとんど不可能ではないか」といわれながら、この難事業にチャレンジし見事に完成された斎藤氏のお話は極めて感銘深いものだった。

斎藤氏は、長年海外からの情報、出版物を日本に紹介してこられたが、これからは日本の古典、出版物を海外に紹介してやろうと壮大な志の下、その第一弾として、この事業を始められたとのこと。（詳細は五ページに。）

斎藤純生氏の講演

「第三の開国と幕末維新」 七月例会は松本健一氏の講演を中心に

七月の例会は、歴史部会担当で「近代日本百三十年を回顧し、現代の問題点を歴史に照らして学ぶ」のテーマに最適任の講師、松本健一氏をお招きして催すことになった。

松本氏は、ペリーの「白旗伝説」から始まり、「開国」「日本の失敗・第二の開国と太平洋戦争」の他、多数の著作があり、「第三の開国」についての評論もある。

今回はその多年のご研究のエッセンスをお話下さるものと期待される。どうかふるってご参加下さい。尚、会場は国際シンポジウムのあった学術総合センターになりますので間違いのないように。

正念場を迎えた日本
五十一番目の米国州になる？

泉 三郎

ちょうど一年前、この欄で「小泉内閣と平成維新」と題し、ライオンヘアーをなびかせて雄叫びを繰り返す小泉首相に大いなる期待を寄せる一文をのせたのだが、このところの状況は残念ながら、かなり色あせたものになってきた。まさに正念場を迎えたといういうべきか。

その折も折、近未来シミュレーション「二〇〇七年合衆国日本州誕生す」が登場した。「文芸春秋」五月号に掲載された水木楊氏の小説である。それによれば、小泉内閣は二〇〇三年早々に崩壊し、続いて麻生太郎内閣、さらには鳩山由紀夫内閣が出来る。が、いずれも何もできず日本の病状はいよいよ悪化する。そして、二〇〇七年、尖閣列島に緊張が走り、遂に「自主独立党」を立ち上げた石原慎太郎と「自由民主同盟」を結成した小沢一郎の一騎打ちとなる。石原は「義」を掲げて軍備強化の独立路線を叫び、小沢一郎は「利」を掲げてアメリカとの合併論をうちだす。選挙の結果はどうか？国論二分と思いきや圧倒的多数で小沢が勝ち、めでたく日本はアメリカの五十一番目の州になるという次第。

いやあ、岩倉使節団の面々の顔が浮かぶ。岩倉、木戸、大久保、伊藤・・・とりわけ随行理事官・佐々木高行の言葉が想起される。「何事も欧米の風によらざれば、わが国の独立は出来ずとは、今日の開化家の思想なり、彼に降参し付属国となるなれば、苦心は無用、早く欧米州に慰斗をつけて渡す方安心ならん、その時にいたらば、真に日本人は死して後やむのみなり」

「第三の開国」期に、「第三の道」はあるはずだ。サッカー騒ぎも一段落の日本列島、一人一人が日本の針路について真剣に考えなくてはならない。七月の例会、松本健一氏を招いての「第三の開国と幕末維新」はその絶好の機会である。

4月例会
全体討議

今後の活動の展開について

四月十三日の例会では、各テーブルごとに自由討議が行われ、その上で各テーブルの意見が報告された。

全体会議における提案

一　若い人に如何にして伝えるか、インセンティブを与えるか

・現代語訳、口語訳が是非必要。
・スライド映像のビデオ化、映画化などワンランク上へ。
・現代訳の要約版、劇画化なども考慮。
・プロモーションビデオができれば、それを利用してNHKなどテレビ各局にも働きかけられるのではないか。
・若者にどう伝えるかの方法論、伝達のメディアについて考えるべきだ。
・実記のある部分を小説にできないか。それをきっかけに関心を高めることもできるのではないか。

二「読む会」について

・当会は「読む会」がベース、ここでまず勉強することから始めるのがよい。
・新入会員にとって、サロン的な雰囲気がとてもいいし、アクセスしやすい。
・ただ現状（多田さんのところ）はスペース的にも限界があるので、別の場所で、別の形で同種のことができないか。ここまでくると収容能力からしてキャパシティを増やすことが必要ではないか。二ヶ月、三ヶ月に一度でもいいから・・・

三　各部会のこと

・いろいろ面白い部会があるので、参加案内を限定しないで広く誘ったらどうか。
・固定した部会に限定せず、いろいろの会に参加しもっと理解を深めることが必要。

四　シンポジウムの記録を生かしたい

・ビデオをみる方法、インデックスをつくる方法、貸出し方法など。
・プロモーションビデオの作成。

五　ツアー企画について

・お墓詣りツアーはどうか、使節団員に限らず周辺の人物を含めてお墓をみることは墓碑銘などいろいろの発見がある
・昨年の那須、今年の大磯など史跡を辿るツアーはとてもよい。
・産業ツアーもあっていいのではないか、使節団は当時の産業、工場などよくみた。われわれは意外と現代の産業の現場

2001年度・活動報告

	全体例会	読む会	歴史	現未来	国際交流	メディア	関西支部
2001年 4月	21回例会 「国際シンポジウム」について	オランダ編 多田幸子氏	「山田耕作の光と陰」 丘山万里子氏				
5月		プロシア編 水沢　周氏			那須野が原 歴史ツアー (5/20～21)		仏国編
6月		英国編 長谷川公一氏	「黒澤　明」を見る 松本正志氏			(ホームページ) リニューアル ◆ニュース23号	
7月	22回例会 「キリスト教」について 山崎渾子氏	女性の目でみた「米英編」 金本君子氏		「小泉内閣を採点する」			
8月						(ホームページ) 英文登場	ベルギー編
9月		スイス編 持田鋼一郎氏			英国ツアー (9/6～13)	◆ニュース24号	
10月 11月	「国際シンポジウム」 11/22: レセプション 11/23: セミナー 11/24: セミナー・映像 11/25: フォーラム			「9/11 テロ事件」		(映像の会)	
12月						◆ニュース25号	プロシア編
2002年 1月	23回例会 「新年懇親例会」 イタリア文化会館	スペイン・ポルトガル編 ゲスト　林屋栄吉氏			(新年懇親会)		
2月		デンマーク編 坂内知子氏					ロシア編
3月		「農業」について 小菅心子氏		「アメリカの外交戦略」		◆ニュース26号	

年間の会員移動〔新入会　38名、退会　33名〕

がどうなっているか、らない。

六　現代語訳について

・少し試訳をしてみたが手応え充分で会の仕事としても重要な仕事になると思う。

・それには具体的に　どういう対象を考えるか、全訳なのか、訳す方針などいろいろ検討しなければならない。

・全訳をつくればいろいろヴァリエイションは考えられる。例えば、ダイジェスト版、教科書用、劇画などなど。

・この事業についてはどこからか　助成金を引き出せないか。

七　東南アジアとの関連を考えていくべきではないか

・東南アジアの人に伝える。

・海外に派遣する日本の若い人に伝える。

八「紀要」のようなものを年一回くらい出してはどうか

・読む会、歴史部会、現未来部会などで、とても内容のあるいい発表が行われているのにそのまま埋もれているのはもったいない。

九　PRについて

ブンブンミーティング

・新入会の動機については会員紹介、勧誘が多い。

・日本経済新聞の記事によって知った人が多かった。

・やはり新聞、メディア、イベントをやることで記事にしてもらうことが必要。

・歴史ツアー、海外ツアーなどを会員外にもPRしたらどうか。

十　本会の魅力について

・他業種、異業種、異なったキャリア、異なった意見の人に会えるのが魅力。

・そのために自然に親しくなれるツアーや、パーティのようなものが必要。

幹事会方針

幹事会が五月三十一日、六月一日の両日開催され、昨秋の国際シンポジウム関連並びに四月の全体例会での提案意見について、次のような方針が確認された。

一．国際シンポジウムの報告書について

・現在、原稿の編集は終り、某出版社と交渉中である。問題は費用であり、会としてどのくらい買い取りができるか、財団などからの助成金の可能性はどうか、などが懸案事項になっている。

二．国際シンポジウムのビデオについて

・先に例会で試写されたものが二十八分に短縮され、あらためて試写された。ただ、いろいろ問題点が出され、さらに再編集をすることになった。尚、七月の例会には映写の予定である。

三．『実記』の現代語訳について

・会の事業としてやれればまことに望ましい。しかし、実際には個人訳にするのか共同訳にするのかの問題がある。久米邦武のように一人の著者で統一できればベストである。幸い、適任と思われる水沢周氏が試訳をすすめておられるので、会として水沢氏に一任することになる。

四．英文で『実記』を読む会について

・若い世代へのアプローチとして、英文で『実記』を読む会を立ち上げてはどうかという提案があり、岩崎洋三氏が担当幹事となり素案をつくって呼びかけることになった。

2001年度・収支報告

2001・4～2002・3

収入		支出	
◎前年度よりの繰越	656,798	◎例会および映像の会関連費用	868,046
◎今年度の収入	2,364,221	案内郵便代	133,530
年会費	1,040,403	会場代他	397,931
賛助会費	15,000	講師お礼・車代	66,905
特別寄付金	500,000	那須ツアー	269,680
例会および映像の会会費	466,000	◎NEWS関連費用	553,515
那須ツアー	340,000	２３～２６号印刷代	372,665
貯金利子	338	送付郵便代	180,850
雑収入	2,480	◎諸経費	972,898
		電話・通信費	278,179
		会場費他	454,719
		事務費	240,000
		◎次年度繰越金	626,560
	3,021,019		3,021,019

3 月末会員数　215名

4月13日例会
講演要旨

『米欧回覧実記』の英訳出版
―その着想から完成まで

日本文献出版社社長
斎藤純生 氏

●『実記』との出会い

斉藤氏は、長年英国系の出版社で仕事をされ主に欧米の学術書、専門書などを日本に輸入することをしてこられた。しかし、その業界も一九九〇年代に到り大学その他の研究機関の新増設も一段落して需要が停滞し、いよいよ新しい時代的テーマと取組まねばならない時期になった。そこで今度は日本の保有する出版文化を逆に海外へ紹介する事業をやろうということで、日本の古典を含めた名著を調べてみた。ところが日本の著名な文学作品、欧米で関心の高いと思われるテーマの本はすでに多くが翻訳書として刊行されていることを知った。しかし、日本の社会、思想、歴史、文化の分野での書物は素晴らしい作品でも意外に埋もれたまま放置されていることに気付いた。そこで早速専門家の助言と指導を仰いで調べてみると、繰り返し候補に上ってきたのが、特命全権大使『米欧回覧実記』なのであった。

●翻訳の困難さと意義

そこで、その『実記』を採り上げようとしたのだが、この書を深く知る研究者たちは異口同音に「それは不可能に近い」という。その理由は色々あるけれど、第一に久米の記述は漢文調である、その上に高雅な名文である、第二に『実記』の中に登場する地名・人名は全てカタカナで音訳表記されている、それを正確に英語で綴るのはなかなかの難事である。第三に欧米人が『実記』の記述を十分に理解するためには、いろいろと注釈をつけねばならない。第四には、ボリュームがすごい。全五巻、二千二百ページに達する大著である。

しかし、それだけの障碍があっても、このプロジェクトは意義の深いものであり、挑戦に価する対象であると覚った。『実記』の英訳版ができれば、欧米各国はむろん、アジア諸国の日本研究者にとっても貴重な資料になるのは疑う余地がない。この英訳版の出現により、恐らく世界の日本研究者が今日まで抱いていた日本観をあるいは修正せざるをえないことになるだろう。そう思うと、挑戦する意欲が湧いた。

●翻訳担当者さがし

いざ、翻訳となると、誰に依頼するかが問題だった。幸い、英国のシェフィールド大学で、一九八九年に『実記』に関する国際シンポジウムが行われ、英米欧の研究者が参加されていたので、そのリストを頼りに翻訳を担当してくださる学者を探した。その結果、とりあえず、米国編についてはプリンストン大学のマーティン・コルカット教授、英国編についてはシェフィールド大学のグレアム・ヒーリー教授が引き受けてくれた。しかし、第三巻以降については難行した。でも、プリンストン大学のマリウス・ジェンセン教授からセントルイスのワシントン大学のユージン・ソヴィアック教授が過去二十年来『実記』の翻訳を手がけているということを耳にした。しかし、実際に当たってみると、その翻訳原稿は散逸放置されたままであり、他にもいろいろ問題があった。そこで紆余曲折があったのだが、第三巻は九州大学のアンドリュウ・コビング助教授、第四巻はケンブリッジ大学のピーター・コーニッキ教授が担当することになり、第五巻はソヴィアック教授のものをベースにすることになった。

●修校作業と資金援助

問題はこの壮大なプロジェクトを統括する編集主幹の重責を誰にお任せするかということであった。この大任をお引き受け頂く先生は、英語に熟達されておられること、しかも高度な専門的な学識の上に、途方もない時間と集中力とスタミナをお持ちの方であることが必須の条件であると考えた。それには、かねてヒーリー教授から紹介を受けていた一橋大学の名誉教授、都築忠七先生が候補にあがった。そしてヒーリー教授とお二人が編集主幹になってくださることになった。都築先生は当時オックスフォード大学出版局の新人名辞典の編纂に参加され、その上英文の日本現代史の執筆を手がけておられた。

こうして翻訳修校作業、編集制作をめぐる作業がすすんだ。第一次原稿は都築先生の他に、津田スクールオブビジネスの元校長であった山田春子先生や明星大学の古田島助教授が担当された。そして最大の難関である資金についても、幸い国際交流基金他の翻訳出版援助を受けることが出来、なんとか企画は実現にすすんだ。

●完成までに八年

そして着想から八年、多くの方の尽力を得ていくたの難

関を乗り越え、ようやく本年二月、全五巻同時に出版できる運びとなった。せっかくの出版だけに紙質もよくし装幀も立派なものにした。それだけに価格は高いという人もあるが、安いと言ってくれる人もある。それは、過去百年余にわたった日本の近代化のルーツを探る貴重な歴史文献であり、その英訳版を通してそれを世界の学究に紹介できることはたいへんな光栄と考えている。

この一大事業の取組みに参加頂き献身的な努力をしてくださった方には、ただただ頭が下がる思いだ。各位の永年に及ぶ専門分野での学術的な研鑽と、英知と熱意なしにはこの企画の実現は不可能であったと痛感している。

少しでも多くの人にこれを読んでもらいたいと思う。

英訳版『特命全権大使　米欧回覧実記』

The Iwakura Embassy , 1871-73

A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe

Compiled by Kunitake Kume

Editor in Chief: Graham Healey (University of Sheffield)
Chushichi Tsuzuki (Professor Emeritus , Hitotsubashi University)

2002年2月刊行　全5巻 セット価　￥115, 000（税別）
2200頁 図版約200枚 182×257mm ISBN4-901617-001
(Published by The Japan Documents)

＜特別頒布について＞

出版元「日本文献出版社」の格別のご配慮により「米欧回覧の会」扱いの場合、特別頒布価格となります。

特別頒布価格；92,000円＋4,600円（消費税）＝96,600円

ご希望の方は「米欧回覧の会」名義の下記郵便口座にお振込み下さい、版元から直送します。尚、ばら売りはしておりませんので念のため。

振込口座番号；００１８０－２－５８０７２９

「関連図書」の紹介

『欧米から見た岩倉使節団』

―イアン・ニッシュ編・麻田貞雄他訳

『実記』の英訳本とは対照的に、英文による岩倉使節団の本が、このたび日本語になって出版された。原本は一九九八年に、ロンドン大学のイアン・ニッシュ教授の編集によってJAPN LIBRARYから出版されたもので、翻訳は同志社大学の麻田貞雄教授らのグループである。

訳者代表の麻田氏は「あとがき」で、こう述べている。

この論文集の原書を手にしたとき、これはぜひとも同志社大学を中心とするグループで邦訳したいものだと考えた。まず第一に、よく知られているように、同志社の設立者、新島襄は当時在米中であったが、文部理事官田中不二麿の「随行」として岩倉使節団の正式のメンバーに加わっている。第二に、本書に収録された論文の大半が、それぞれ使節団の歴訪国の研究者によって執筆されているので、正確な邦訳を期するためには、各国に関心をもつ訳者を配する必要があった。

そして本書では、使節団が米欧歴訪国でどのように眺められ、受け入れられたか、欧米諸国の政府や国王、民間団体や一般庶民が遠路日本からの来客をあくまで丁重にかつ敬意をこめて（時には熱狂的に、時には好奇心を混えて）歓待し、いろいろと視察の便をはかっているか、また、使節団員も威厳ある適切な言動で歴訪国の人々に好印象を与えたか、などが論じられ、たいへん興味深い。

◇出版元　ミネルヴァ書房（京都）
◇価格　三千四百円

『岩倉使節団の歴史的研究』

―田中彰著

岩波文庫版の『米欧回覧実記』全五冊の校注者として馴染みの深い高名な歴史家の田中彰氏が、永年の「岩倉使節団研究」の集大成ともいえる書物を出版された。

著者はその趣旨を「あとがき」でこう述べている。

「本書に収めた私の岩倉使節団ないし『米欧回覧実記』の論稿は、岩波文庫版各冊に収めた『解説』を基本にしながら、その後の研究成果を加えて再構成し、全面的に改稿してまとめたものである」

そして、こうも追記されている。

「岩波文庫版五冊の『解説』のときには、まったく不明だったものが、新たな史料や分析などによって明らかになったところも少なくない。（中略）本書によって、多少なりともその不備を補う責を果たすことができたら望外の幸いである」

研究者にとっては必読の書といえるだろう。

◇出版元　岩波書店
◇価格　一万円

小村寿太郎外交の功罪について

深津真澄氏 ―「歴史部会」での報告から

日本近代史の転換点を探るという視点から小村外交が採り上げられた。深津氏はジャーナリストらしく、明快でわかりやすく、周到な準備の下に代表的な論者の評価を紹介しつつ自らの見解も述べられた。紙面の都合で箇条的に要約する。

＊小村の人物像

・小柄で目がくぼみ、頬がこけネズミを連想させる。
・外国の外交官からは「ラットミニスター」、邦人にも「小村のチュー公」といわれた。
・親父の借金を背負って返済に追われ、また浪費癖のある妻にも悩まされた。
・秀才、寡黙、藩閥嫌いで独立独歩。
・毒舌と放胆な行動力の持ち主。

深津真澄氏

歴史部会

5月23日（木）
国際文化会館

・陸奥宗光と並んで国家理性を体現したような人物。（粕谷一希評）
・粘りに粘る　えげつないほどの交渉力。
・官僚秀才世代であり初代の維新革命経験組ではない、そこが伊藤や井上や山縣とは違う。
・岡崎久彦氏は、国粋主義（日本主義）、国権主義、帝国主義（領土拡張外交）と規定。

＊功績、プラス面

・国力のギリギリの限界まで国益を主張し成功した帝国主義時代の現実的外交。
・個人の名が付く日本外交は、陸奥、小村の外は、幣原、吉田くらい。

＊罪過・マイナス面

・寡黙でPR下手、非民主的、秘密外交、政党には拒否感。
・近隣諸国との友好関係を確保するという視点を欠いた。
・韓国併合の断行を建言し、実行。
・後年の大陸への侵略政策に道を開いた。

『実記』における農業について

小菅心子氏 ―「読む会」での報告から

実記を読む会では、三月と四月の二回にわたり、小菅心子さんが右記テーマに沿って極めて内容の濃いご報告をされました。

今回は、そのまとめの部分だけを要約して掲載します。詳しく知りたい方は、「読む会」へご連絡ください。

まとめ

一・イギリスは世界農業史の上でこの時期、先端を行く農業国であったということ。
（世界中の農業のモデルとされていた）
二・使節団の帰国後、イギリスを農業の師と仰いでその農業を懸命に取り入れようとしたこと。農業博覧会、農業試験場の受け入れ等。（実記の意義）
三・西欧科学農法の取入れが結果として、官公主体になったこと。在来農法との結合に時間を必要としたこと。
（明治二十年代に入ってから）
四・日本でも産業革命と農業革命が同時に進行していったこと。
（久米邦武の見方が正しい）

リヴァプール
ドックの水門及び穀物倉
『米欧回覧実記』第二編より

問題点

一・地主制度への批判が『実記』に無いこと。農奴制と七十二年の田畑の「永代売買の禁を解く」や地租改正とのすりかえ、小作人、「水飲み百姓」への言及も無い。
二・本格的な牧畜の取り込みは大戦後を待たなくてはならなかった。
（クラークの実績は、牧畜農業よりもむしろ教育面での功績ではないか）
三・現在の日本の農業がいみじくも大英帝国時代のイギリスの農業を追いかけていること。
・十九世紀後半のイギリス農法
・国際分業論に支えられ衰退
・伝統的複合経営（農作物と牧畜）から、きわめて労働粗放的な単作経営に移行
・輸入飼料による資本集約的な単作経営に転化
・安価な農作物の輸入・・アメリカ、カナダ、オーストラリア、アルゼンチン
四・農業技術の受け入れにおいても、（稲作のため）和魂洋才。洋才は、形而下的な部分のみを取り込むことになるが、本来それは、形而上的な物と一体のもの。他の文化の受け入れ方と同じことが農業の受け入れの場合にも見受けられる。
（和魂・・・稲作文化によって支えられているのではないか？）
五・自主の精神。米欧の自主の精神については、的確に把握していると考えられる。しかし、それが明治政府の政策に反映されなかったことについて。
（帰国後の久米さんと自主の精神）
六・米欧での見聞が生かされず、その後もひきつづき日本では米作に重きがおかれる。

発表する小菅氏（中央）

『実記』へ新しいアプローチ
「現代日本語訳」と「英語で読む会」

全体会議の提案に基づき、早くも具体的に次のような企画が進んでいます。

『実記』の現代日本語訳について

『実記』を現代語訳にすべきだという要請は以前からありましたが、ここへきて英文訳が完成したことにより、お尻に火がついた感じです。何故なら、外国人は『実記』を容易に読めるようになったのに、肝心の日本人が容易に読めないようではいかにもまずいではないか、これは緊急事態であるぞ、という次第です。

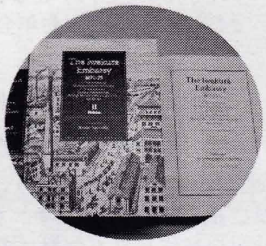
そこで三月ころから泉三郎、水沢周、石川直義、小林養丈氏らの有志が集まって試訳なども試み、共同訳の方向も探ってきましたが、結局のところ、出来れば一人の筆で通した方が望ましいということになりました。それには水沢周氏が快調なスピードで試訳をすすめておられ、本格的に取り組めば独りでも二年くらいあれば全五巻も可能だとの感触が得られたこともあります。水沢氏はノンフィクション作家として多くの著作があり「実記を読む会」では設立以来チュウター役を務め『実記』にもっとも通じている会員です。そこで翻訳作業自体は水沢氏に一任し、会としては発行・出版などの側面、さらにはメンバーとしては下訳、調査、チェックなど、必要に応じて協力する体制をとることにしました。

「なにぶん、旅は長丁場のことでもあり、記録は多面的な範囲にわたっており、現地の状況、歴史的事実、専門的な知識のチェック、注釈の問題など、会員の皆さんにはいろいろご協力をお願いすることがあるかも知れませんが、その場合はよろしく・・・」とは水沢氏からのメッセージです。

さて、この大事業が順調に進めば、当会設立十周年には「現代語訳・米欧回覧実記」が出現する運びとなり、会としてもまことに嬉しいことであり、鶴首してその完成を待ちたいと思います。

「英文で実記を読む会」

「米欧回覧実記」英文版が出版されたため、英語で入る方がわかりやすいとの人が少なくなく、特に若い世代にこの傾向が強いので「英語で実記を読む会」をつくろうという話が持ち上がっています。これは英語の勉強にも漢語の勉強にもなり、併せて会の若返りにもなるという「一石三鳥の妙案なり」と大いに期待されています。担当幹事は岩崎洋三氏です。関心のある方はホームページまたは、岩崎氏のメイルにご連絡下さい。



英訳版『米欧回覧実記』

久米美術館ご案内
「久米邦武の見た世界」

久米美術館は、邦武関係の収蔵資料を『久米邦武文書』として平成十一年以降刊行してきました。

昨年十一月に第四巻（中国古代・近代史論）を刊行して完結の運びとなり、久米美術館では、『久米邦武文書』全四巻完結を記念して、関係する収蔵資料展示「泰西と泰東―歴史化久米邦武の見た世界―」を七月二十一日まで開催しています。

久米美術館は、東京のJR目黒駅西口駅前、三井住友銀行のある久米ビルの八階にあります。（十時～十七時・毎週水曜日休館）

関西支部の現況

連絡　山崎 岳麿
Tel&Fax　06-6853-3137
takechan@tcct.zaq.ne.jp

■例会報告

五月二十一日、十三名が参加。今回は四巻の北ゲルマンの総論から始める。

プロシャは無理して統一していない。「人民を強いて、故習を廃するの利益は、甚だ少なくして、その守常の心を傷リて不安堵をあたふるの不利益は、甚だ多ければなり」の記述で、日本の朝鮮政策の失敗が、今の韓国とのトラブルを招いているのでは、との話から、教科書問題、自虐教育などの話へ飛び、激論一時。まあまあ適当で納めて、「実記」でフランクフルト、ミュンヘンの観光案内的な部分を読む。ハリマ・ガーデンとあるのは Palmengarten で、現存している。立命館の辻先生はゲーテの家へ行かなかったのがご不満のようだが、さて久米はゲーテの名さえ知らなかったろう。

早く終ったので、三宮さんのバルト三国からドイツへの旅行のビデオを見せていただく。欧州の街が運河で開けた事、川と運河で物資が流通していた事がよくわかる。

（山崎）

「米欧回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　員　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回くらい全体例会をもちます。

分科会　テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関紙　年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹　事　会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局　当面「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729　米欧回覧の会

「米欧回覧ニュース」のバックナンバーはホームページに掲載されています。また、インターネットサロン（会議室）にも気軽に参加してください。

http://www.iwakura-mission.jp

＜催し案内＞

2002年７月～10月の予定です

☆7月全体例会

日　時;７月27日（土）　午後
・会務報告　13：30－15：00
（国際シンポジウム・ビデオの映写）
・講演＆デスカッション　15:00－18:00
・スナックパーテイ（懇親会）18:00－19:30
場　所;学術総合センター（神田一橋）
テーマ;「第三の開国と幕末維新」
講　師;松本健一氏（作家、評論家、麗澤大学教授）
会　費;２０００円　（懇親会は別に;１５００円）

☆実記を読む会

７月４日（木）;東西風俗の比較
９月12日（木）;鉄・鋼について（室賀脩氏）
10月３日（木）;貿易論について（藤原宣夫氏）
場所；いずれも
南青山クラウンインターチェンジ内サロン

☆現未来部会

日　時；７月10日（水）18：30－21：00
場　所；日本プレスセンター九階大会議室
テーマ；「政府・企業・NPOの協働に向けて」
講　師；長坂寿久氏（拓殖大学教授）
問い合せ・申し込みは、担当幹事または事務局まで

☆イタリア・ツアー

～岩倉使節団の足跡を訪ねる旅～
「西洋文明の源流・イタリアを往く」
期　間；10月５日（土）～10月14日（月）
問い合せ・申し込みは、事務局まで

☆関西支部例会

日　時；８月７日（水）12：00～
場　所；大阪凌霜クラブ会議室
問い合せは山崎まで（Tel・Fax：06-6853-3137）

☆展覧会

「泰西と泰東―歴史家 久米邦武の見た世界―」
日　時；７月２１日（日）まで（水曜休館）
場　所；久米美術館（ＪＲ山手線目黒駅前）

編集後記

◇七年目を迎えた活動は、多面的に拡大をしています。大磯歴史ツアーの企画には八十人をこえる参加者があり、サロンとしての裾野の広さを感じます。一方、『実記』現代語訳のように、知識・能力・パワーを必要とする極めて高い水準の活動も進行しています。

◇二百名を越える会員の意見をまとめ、活動を推進する幹事、プロの技術を提供するビデオ制作などの裏方そして事務局の負担は限界に近づいています。また、活動の拡大によって個々の会員が全体像を見失い、疎遠になる事態も懸念されます。それぞれが、会における自分の位置をもう一度見つめ直す時期にきています。

◇電車内の、決して若くないご婦人たちが、護国寺の由緒や大隈重信、山縣有朋などの墓を訪れた話に熱中しています。やがて、話題は開催中のW杯に移り、外国選手の名を次々と挙げて、試合展開を論じていました。領域を選ばない日本人の好奇心と徹底ぶりは、いまだ健在です。（N）